上杉文華館 目録
2025年11月27日（木）～12月21日（日）
謙信・景勝に手紙を書く⑨～大名家の事情Ⅲ…武田氏

	資料名	員数	法量　(cm)	時代	作者	所蔵
複製	上杉本　洛中洛外図屏風	六曲一双	各160.4×365.2	原本　永禄8年（1565）	狩野永徳	上杉博物館
国宝	上杉家文書 武田勝頼書状	一通	22.3×46.8	（年未詳）2月6日		上杉博物館 文746
国宝	上杉家文書 武田信豊書状	一通	11.5×18.2	（天正6年・1578）6月12日		上杉博物館 文844
国宝	上杉家文書 小山田信茂書状	一通	34.1×43.5	（天正9年・1581）5月18日		上杉博物館 文808
国宝	上杉家文書 跡部勝資書状	一通	19.2×49.7	（天正7年・1579）3月21日		上杉博物館 文648

2025年度の上杉文華館は「謙信・景勝に手紙を書く」と題して、国宝「上杉家文書」などを展示します。

戦国時代、書状は一定の規則に則って書かれました。このような規則を書札礼といい、差出人と受取人の関係が反映されていました。それをまとめた書札礼書も作られました。そこには差出者の社会的地位に応じた規範が示されています。その適用は厳密であり、ゆえに実際の書状の書き方から両者の関係を知ることもできます。東国の大名間では、差出は実名に花押、宛名は名字に殿の尊称という表記が、原則的に対等な関係を示していました。特別な内容や礼状などでは、宛名に「謹上」のような上所、差出の実名に官途や姓などを加えて厚礼とし、より丁寧な気持ちを表すこともありました。

永禄4年（1561）、謙信（長尾景虎）は上杉憲政から名跡と関東管領の地位を譲られ、上杉氏を名乗ったことはよく知られています。これによって謙信、景勝はその地位に応じた書状を受け取ることになりました。宛名には、「上杉殿」や「上杉弾正少弼殿」などの名字を冠したもの、「山内殿」や「越府」、「春日山」などの地名を記すもの、また本人ではなく、報告を求めて側近に宛てたものなどがみられます。これらは差出人の立場によって選ばれますが、その基準をみていくことで、謙信や景勝の地位、諸大名家の権力構造、東国社会の変容などがみえてくると思われます。2025年度はこの解明に取り組んでいきます。

対立のイメージの強い上杉氏と甲斐武田氏ですが、謙信の死後、上杉景勝と武田勝頼は和睦し、同盟を結びます（甲越同盟）。景勝と景虎の後継者争い（御館の乱）や、勝頼と織田・徳川勢との対立の激化などの情勢の中での判断でした。

武田氏の書状の特徴は、宛名に「山内殿」ではなく、「上杉」の名字を使用することが挙げられます。そして、「上杉」の使用は武田氏一門にもみられ、現象的には佐竹氏同様です。勝頼と景勝の関係は勝頼の優位で始まっていて、「山内殿」の表記は適さなかったといえます。また、譜代家臣の上位者が「春日山」表記で景勝に直接宛てた書状を出していることも特記されます。全体的に武田氏を優位とした礼的関係であったともみられます。

このような書札礼の秩序が、信玄時代に遡るのか、それとも長篠合戦などを経た家臣団の再編の結果であるのかなど、武田氏家臣団の検討を深め、佐竹氏との共通性や相違なども意識しながら、武田氏の特徴を明らかにしていく必要があります。

「国宝上杉本洛中洛外図屏風」は、現状に基づいて制作した2000年制作の複製Bを展示します。